

〈研究総論〉 学びの自覚 (第1年次) :
教科で願う学びを子どものあらわれから考える

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉山, 慎一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028062

<研究総論> 学びの自覚（第 1 年次）

—教科で願う学びを子どものあらわれから考える—

研修部長 杉山 慎一郎

1 本年度の取り組み

2020 年度は、研究テーマ「学びの自覚—教科で願う学びを子どものあらわれから考える—」（第 1 年次）を主題・副題として新たに設定した。この研究テーマは、主に前年度までの研究テーマである「共に創り上げる授業—「教科ならではの文化」を味わう子どもたち—」での研究実践を土台としたものである。

9 月には全体研究として理科の授業を行い、全職員で子どもたちのあらわれの分析を行った。また、共同研究者を含めて 6 名の先生方に参観していただき、ご意見をいただいた。全体研究で見いだされたことを踏まえて、理科以外の 9 教科 9 授業において、校外の先生方にご参観いただきながら職員をいくつかのグループに分け、分析を行った。以上の授業における実践報告は、静岡大学教育実践総合センター研究紀要（第 31 巻）、静岡大学教育学部附属静岡中学校研究紀要（第 21 号）としてまとめた。本稿は、これらの実践を踏まえた、本年度の研究における成果と課題を整理するものである。

2 研究の概要

本校では、社会において価値あるものごとやふるまい（見方・考え方、感性、表現の仕方など）を分類したものが教科であると考えている。そして、人間がよりよいものを創りあげる営みを「文化」と捉え、教科らしいふるまいをしている人々の営み、すなわち「教科ならではの文化」を味わう授業を実践してきた。教科ならではの文化を味わう授業づくりにおいて大切にしたいこととして、以下の 3 点が見いだされている。

- ①教科の本質にせまる題材づくりと題材構想
- ②共有された問いに基づく追求（追究）活動
- ③「教科ならではの対話」を生み出すこと

前年度までの研究における課題として「子どもたちが学んだことを自覚し、新たな問題解決場面でも自在に使いこなしているか」「子どもたちが教科ならではの文化を味わっている姿が、教科の学びとどのようにつながっているか」ということが十分に分析されていないことが挙げられた。

そこで本年度は、前年度までに見いだされたことを踏まえ、教科ならではの文化を味わう授業を実践する中で見られる子どもたちのあらわれから「教科で願う学び」を教師が捉え直すことから研究を始め

ることとした。

各教科において「教科で育みたい人間像」と、授業を通して味わうべき「教科ならではの文化」、教科で願う学びを含めた「授業づくりにおいて大切にしたいこと」を「教科の主張」としてまとめた。授業実践と分析をするにあたっては、複数教科で教科群を構成し、授業案検討を経たうえで、授業参観および分析を行った。全体研究では、子どものあらわれを質的、量的両面から分析し、子どもたちにどのような学びのあらわれがあったのかということが多面的に捉えた。

3 研究の成果と課題

全体研究における理科の授業実践と分析から教科で願う学びとその要因について考察し、以下のように見いだした。

- (1)電流と磁界の関係性という題材の本質にせまる学びが多くの子どもの育まれていたこと
- (2)予想、実験、結果、考察というサイクルからなる科学的な探求のプロセスは学びであること。また、そのプロセスは題材の本質にせまる学びのあらわれが子どもたちに見られた要因でもあること
- (3)子どもたち自身が考えた実験に基づいて考察することは学びを深める最も大きな要因であること
- (4)題材づくりと題材構想、問いの共有、教科ならではの対話という授業づくりにおいて大切にしていることは、子どもたちの学びを育むことにつながっていること

以上のように、子どもたちのあらわれから教科で願う学びとその要因が少しずつ明確になってきていることは、大きな成果であると言える。

1 月 21 日に行われた令和 2 年度先進講話において、上智大学総合人間科学部教育学科 奈須正裕教授は「教科の本質＝見方・考え方」について以下の 2 つの側面から述べている。

- ・その教科ならではの知識・価値・美の生成方法
- ・その教科等に固有の知識・技能を統合・包括する中核概念

この 2 つの側面は本校が教科で願う学びとして見いだしたことにつながると考える。全体研究において見いだされた教科で願う学びのあらわれは、価値ある学びの姿であると言える。

全体研究後、研究を進める中で、私たち教師が、学びという視点で子どもたちのあらわれを見とる価値を実感し、教科で願う学びについて考えを深めることができた。このことは、授業づくりにつながる大きな成果である。今後も、研究を進めるにあたり、教科ならではの文化を味わう授業を土台として、子どもたちの姿やふるまいを総体的に見とることを継続していきたい。

全体研究を通して見いだされた課題は以下の通りである。

- (1) 各教科で見いだされたことから、私たちが願う学びを明確にしていくこと
- (2) 題材や教科をつなげて学ぶ子どもたちのあらわれについて研究を進めること
- (3) 子どもの学びが有機的につながる手だてについて捉え直すこと

以上のことは、「学びの自覚」という研究テーマを進めていくために必要なことであり、課題であると考えている。

今後は、本年度の成果と課題を踏まえ、教科ならではの文化を味わう子どもたちと教科の学びのつながりや、学んだことを自覚する子どもたちのあらわれについて研究を進めていきたい。